

# 西洋にさらされた日本人の自己主張

——新渡戸稲造の『武士道』——

平川 祐 弘

## 要 旨

新渡戸稲造（一八六二—一九三三）はすぐれた農政学者であり行政官であるが、同時にカーライルに傾倒した教育者であり啓蒙家でもあった。外国文化にさらされたために日本人のアイデンティティーを武士道に求め、英文で *Bushido — the Soul of Japan* を一九〇〇年に公刊した。国際主義者であり同時に「日本の常習的弁護人」とも呼ばれた愛国者でもあった。この著書と著者に対してはバジル・ホール・チェンバレンを初め、西義之、太田雄三にいたるまで批判者が絶えない。他方、矢内原忠雄を初め新渡戸山脈と呼びうるほどの尊崇者もあり、彼の弟子たちは日本の親西洋の自由主義者の中核を形成した。その系譜は台湾の李登輝前総統にまで及んでいる。私自身も最後の *Nitobe boy* と呼ばれた前田陽一教授が創設した駒場の東大教養学科で教育を受け、その恩恵を深く受けた。伝記の中では杉森久英の一冊がこの「世界の中の日本」を指摘した新渡戸の面目を比較的よく描き出している。

ところで日本におけるナショナリズムとインターナショナリズムの相克は、我国の近代史をいろどってきた大問題である。それはまた文化交流などのコンパラティズムの諸問題を論ずる際の前提ともなるべき問題であるとも筆者は了解している。ではその際の国際主義とは一体どのようなものであるべきか。その問題の解明の一助とするためにも、時代に先がけて世界にさらされた人、新渡戸稲造の場合を考察し、比較研究者としての私たちの立場を確立するよすがとしたい。

なお、二〇〇三年前期、北京日本学研究中心から私を指導教授として新渡戸稲造について学位論文を書き上げるべく王曉静が大手前大学大学院に留学した。その機会にかねてからの私の考えをまとめたのが本稿である。新渡戸関係文献を即座に取揃えてくれた大手前大学図書館に謝意を表す。

キーワード…武士道、アイデンティティー、世界の中の日本人、義務、比較研究者

本論まえおき

なぜいま新渡戸稲造をとりあげるのか。日本人として初めて英語でまとめた日本人論である *Bushido* を著わした新渡戸稲造は、日本で初めて比較文化論を試みた学者だともいわれる<sup>①</sup>。しかしこれから述べる考察は、比較研究者としての、ないしは交流文化研究者としての、私たち自身の仕事振り<sup>②</sup>と照らし合わせて新渡戸稲造の仕事振りを眺めようとするものである。あるいは新渡戸の生き方に照らして日本の比較研究者の生き方を再吟味する試みでもある。新渡戸を論ずるとともに私たち自身の立場をより自覚的に再確認しようとするものである。私たちは国際間に跨る人として両足をどこにどのように据えるべきなのか。立脚点はどこにあるのか。複数のコンパスの脚を持つべき私たちは主脚をどこに据えるべきなのか。そのようなコンパライストはいかにあるべきか、という問い掛けは大学の制度改革の節目においてのみか、私どもの人生の節目においても、なされてしかるべき問題提起や自己反省ではあるまいか。その自己反省の一つのきっかけとして新渡戸を論ずるのであって、自己の立場を不問に付した新渡戸研究を行なうわけではないのであるから、その点はあらかじめ御了承願いたい。

一 森鷗外と新渡戸稲造

新渡戸はどのようにすれば文化史上に明確に位置づけることができるのか。新渡戸を森鷗外、内村鑑三、辜鴻銘<sup>③</sup>など三、四の人と対比することによって彼の位置づけをまず試みたい。

新渡戸稲造は森鷗外と同じ一八六二年に生まれ、鷗外より十一歳長生きして一九三三年十月十五日にカナダのヴィクトリアで没した。いかに国際人らしい最期という印象を与えた。日本暦の昭和八年で、満州事変が始まった翌年、私が二歳の時のことであった。満七十一歳で亡くなったから、長生きした人という印象をかねてもっていたが、いつのまにか私の方が年長になってしまった。そのような年齢から振

返ると、かつて私自身が新渡戸に対して抱いていた評価そのものにも多少変化が生じたことを感ぜずにはいられない。実はかつての私は新渡戸にたいしてすこぶる冷淡であった。

若者には尊敬する人物というか自分もこうなりたいというモデルがある。森鷗外はかねて私ども比較研究者の研究対象であったが、実は単にそれだけではなかった。鷗外という人の生き方は私ども比較研究者の *role model* でもあったからである。私が半世紀前留学する時に送別会の席で「二本足の学者」になることが理想として説かれた。これはもちろん鷗外の言葉を念頭に言われたことで、鷗外のように生きることこそが、余人は知らず、私どもがひそかに掲げた理想でもあったのである。鷗外はすぐれた翻訳によって西洋文化を日本に紹介しただけでなく、独創的な作品を著わすことによって日本の知的社会をリードした。私どもも及ばずながら翻訳だけでなくオリジナルな学問研究の成果を芸術的な作品にしあげて世に示そうとつとめてきたのである。その目標をどこまで達成できたかはともかくとして、すくなくとも理想はそこにあった。

当時の私たちというか、私の目はアメリカよりもヨーロッパに向いていた。それだからかもしれないが、森鷗外が理想的先達に見えたのに反し、新渡戸稲造は私の視野に浮かんでこなかった。<sup>(2)</sup> 鷗外の文筆活動に比べると、新渡戸の文筆活動は芸術的に劣る。日本語で書かれたものの多くは啓蒙的雑文である。講談社学術文庫から出た新渡戸著『西洋の事情と思想』の解説を依頼された際に私は「世の中には一方に高度な学術的内容を含みながらしかも読みやすく書かれている啓蒙書がある。他方に、必ずしも学術的内容を含んでいないが通常平易に書かれている啓蒙書もある。本書はその後者に属するものである」と書いた。一九八四年のことである。一般に文庫本の解説など著者の提灯持ちに類した内容が普通だから、私のネガティブな評価に出版社側は苦い顔をして辟易の気味であった。しかし私の『西洋の事情と思想』に対する評価そのものは今も二昔前と変わらない。だがそれにもかかわらず新渡戸の生涯の行跡に対しては、近年敬意の念のつるのを覚える。日欧関係に比べて日米関係の重要性が増大するにつれて、私自身もヨーロッパよりアメリカと関係をもつことがなにかと多くなった。東京大学の学部でフランス語やイタリア語を教えるにもかかわらず、大学院担当者としての私自身が使う外国語も四十代の後半からは英語が断然多くなった。それやこれやで、生涯英語を駆使した新渡戸における諸問題を、私どもコンパライティストが体験する諸問題と比べあわせて検討したい気持にかられるのである。

## 二 外国語

比較研究者には複数の外国語の能力は不可欠である。新渡戸稲造の世代は物心がついた時、明治維新であり開国であった。ということとは当時の頭の良い子の何人かは選ばれてもっぱら英語など外国語漬けになって勉強した、ということである。太田雄三氏が『英語と日本人』(TBSブリタニカ、一九八一)でいう「英語名人世代」とはすべての普通学をも英語で習った世代をさすが、新渡戸はその一人である。彼は満十一歳で東京外国語学校に入学し、満十五歳で札幌農学校第二期生として入学した。そして満二十二歳でジョンズ・ホプキンス大学に留学した。そして三年後の一八八七年にはさらにドイツへ留学した。

ところで昭和一桁世代も物心ついた時、敗戦であり第二の開国であった。しかし日本人一般は普通学を日本語で習っていたから、英語名人世代の再現とはなりがたかった。<sup>(3)</sup> それでも東京大学教養学部教養学科のインテンシヴな外国語教育は例外的に徹底した二年半で、各方面に英才才媛を送り出したが、日本で比較研究者が出てくる上でもかけがえない良きバックグラウンドを提供してくれた。そして後述するように、教養学科の創設には新渡戸の理想とする教育理念が実は無関係ではなかったのである。私自身は新渡戸の愛弟子であった矢内原忠雄氏が東大教養学部長、東大総長の時代に東大生で、その上、最後の *Niobe boy* と呼ばれた前田陽一教授が中心となって創設した駒場の、当初は六十名の学生のための後期課程である東大教養学科で教育を受けた。日本の比較文学比較文化研究の有力な母胎の一つは駒場であるから、そうした背景にふれつつ論ずることもなにとぞ許していただきたい。比較研究者に外国語の力は絶対に必要であるから、まず言葉の問題にふれた次第である。

## 三 国際心とは何か——インターナショナルリズムの価値基準

ではなぜ外国語をインテンシヴに習ったのか。それは文明の中心は外国にあると感じたからである。明治の開国に際しても、敗戦後の第

二の開国に際しても、西洋に対する憧れは強かった。それが日本の比較研究のドライヴィング・フォースとなっていたのではあるまいか。偏狭な日本本位は困りものである。戦時中の陸軍軍人のような日本至上主義は御免こうむりたい。そうした気持は子供心にも強かった。学問世界でも一国本位の発想は困る。その考え方を延長すると、単に一国ナショナリズムだけでなく、排他的な一国単位の学問研究も時に困りものであることがわかるのである。

そこで国家主義に対するものとしての国際主義や国際心が説かれた。だがその実体は何であったのか。国際主義といってもモスクワ本位のインターナショナルリズムもあった。アングロサクソン本位の国際主義もあった。それは今はグローバルリズムと称している。フランス文明中心の普遍主義もあれば、西洋キリスト教本位の普遍主義もあったし、今もある。一見国際主義を奉ずるかにみえる国際比較文学会も東京で開催されるまでは明らかに西洋中心の国際主義だった。公式用語は英語とフランス語であって、戦前の国際聯盟と同じく欧米先進国クラブであった。

そのような国際主義のいずれを私たちは良しとしてきたのか。日本人の精神状況はどうだったのか。敗戦後の日本人としての自信喪失の状況下では、知識人や大学生は日本中心主義を唱えることはありえなかった。しかしだからといって占領下に来日した宣教師が説くキリスト教に日本人が特にひきつけられることはなかった。いいかえるとアメリカのキリスト教本位の普遍主義に日本人が全面的に服することはなかったのである。それは半世紀前にアメリカ人を妻とシクエーカーとなった新渡戸の場合でもそうであった。後述するように新渡戸が『武士道』を書いたのは彼の中に自己の日本人としてのアイデンティティーを主張したい気持があったからである。世界をキリスト教と異教の二つに分け、前者のみを良しとする発想に新渡戸は反撥した人なのである。

そのような反撥はインテリ層の日本人キリスト教徒にも潜在的に存在した。敗戦後の日本で脚光を浴びたのが日本人が中心となって活動した無教会派のキリスト教であったということは、彼らもまた日本人としてのアイデンティティーを実は暗々裡に求めていたからであろう。敗戦直後の東京大学では南原・矢内原と二代続いて無教会派のキリスト教徒が総長をつとめた。昨今と違って東大総長の発言が総理大臣の施政方針演説以上に注目されるような異常な雰囲気の時であったから、昭和初年まで無教会派のリーダーであった内村鑑三（一八六一—一九三〇）が、その平和主義とあいまって、たいへんな注目を浴びた。しかしそのような現象には自分たちは西洋のクリスチャンとは違っ

という日本人性へのこだわりも実は無関係ではなかったのである。

#### 四 内村鑑三と新渡戸稲造

ところで新渡戸の位置は内村の位置と連動して規定されてきた。内村と新渡戸はいつも対になる存在として扱われることが多かった。二人は共に東京外国語学校、札幌農学校の出身者である。いちはやくキリスト教に改宗した。二十代でアメリカに留学した。帰国後第一高等学校で、地位も時期も違うが、教壇に立っている。二人とも英語で日本について語った。日米関係についても多く論じた。それぞれ論壇の雄であった。内村も新渡戸もクリスチャンではあるが、内村はいかにも宗教家と呼ぶにふさわしく、新渡戸は宗教家というより教育家と呼ぶにふさわしい。内村が無教会であったのに対し新渡戸はクエーカーであった。

しかしその二人のコントラストについてはこうもいわれた。三谷隆正は一高の若い同僚の竹山道雄に「内村さんは圭角があったが、真に尊敬すべき人だった。それにひきかえ新渡戸先生の方は、近く接してみると尊敬地を払ってしまうような人だった<sup>(4)</sup>」と言った<sup>(5)</sup>のである。

そして日本ではこれに類した人物評価がまかり通った。一体、日本の論壇では出世でなく挫折が、常識でなく反抗が、調和でなく破滅が、文学青年や思想青年には魅力があった。それだから孤高のおもむきのある独立独歩の内村が尊敬されたのに対し、官界に仕え、世間的常識の尊重を説き、通俗啓蒙雑誌で修養をすすめた新渡戸は、俗物とみなされたのであった。日本の思想家にとって反常識的な超俗は古来なんとなく権威があり、一種の美意識ともなっていたからであろう。

しかし新渡戸の常識には尊ぶべきものがある。内村鑑三やそれに類した人では、国際聯盟事務局次長などの職務はものの一週間といえども勤まらなかつたであろう。こと対社会的発言に関しては、内村の言説よりも新渡戸の時事的発言の中に傾聴に値するものははるかに多いのではあるまいか。新渡戸に言及する数少ない戦後の日本人の中に同じく国際官僚として働いた緒方貞子氏がいることは注目に値する。緒方氏は一九二〇年代の自由主義的民間団体の性格を分析し新渡戸が果たした役割にもふれている<sup>(5)</sup>。

## 五 International minded persons の養成

東大教養学部教養学科（一九五〇年創設）や大学院比較文学比較文化課程（一九五三年創設）のような新しい学科や新しい大学院<sup>(6)</sup>はどのようにしてできたのか。島田謹二教授は新制度ができたからこそ存分に教育者としてまた研究者として力を発揮することができたが、その新制度はそもそも誰がお膳立てしてくれたのか。

敗戦直後の日本の文部大臣は前田多門であった。この人は一高生として新渡戸の弟子であり、クエーカーであり、ジュネーヴやニューヨークで積極的に働いた。東京大学に教養学部教養学科を創設した一高教授前田陽一はその長男でジュネーヴ育ち、フランス語は真に見事だった。戦時中はヨーロッパで外交官もつとめ、教育者としても、学者としても、行政官としても、拔群だった。矢内原学部長の支持もあって創設された教養学科の理念は偏狭なナショナルリズムを排し、international minded person を養成することといわれた。「国際心」を養成し、世界の中の日本という自覚をもつ、とは日露戦争後、牧野伸顕文相のイニシアチブで新渡戸稲造が一高校長に迎えられた時に唱えた主張であり、その考え方が一高の良き伝統を守りつごうとした駒場の東大教養学部教養学科に引き継がれたわけである。そして東京大学駒場では大学院比較文学比較文化課程は、国際関係論課程とともに、その教養学科の上に築かれた。そのような成立事情が背景として存在した。本郷の旧帝国大学の学問区分がナショナルな単位であったとするならば、駒場の大学院の学問的理想はナショナルな区分や、国家単位の壁を破るところにあった、といえるだろう。

## 六 世界の中の日本

そのような比較文学は「世界の中の日本」を考える上で有効な学問ではあった。しかし当初は小専門家意識にとらわれていたこともあって、日本文学に対する西洋の影響ということがもっぱら問題とされた。そしてその際、無言の前提として西洋から影響をこうむることは良

いことだ、という意識があった。世界の中心は西洋であり日本はマージナルな存在であって、中央の感化を浴びることが良いこととされたのである。学士院賞を受けた島田謹二博士の主著は『日本における外国文学』と題され、副題に「比較文学研究」とある。日本が影響を受けたことは当然プラスとして認識されていたのである。もともと西洋学者ではあったが島田先生にとって日本文学は大切なものであった。島田先生にはまた日本人にとっての西洋文学とは何か、という日本人の主体性にまつわる問題意識があった。そうした意識が未整理ではあったにせよともかく存在したから、島田先生は比較文学に向かったのだともいえよう。<sup>(7)</sup>

もともと島田先生にも影響・被影響の関係、西洋文学の受容ということの調査だけには甘んじることのできないなにかがあった。北原白秋が四十になった島田氏に向かって「あなたはまだこれという仕事がないねえ」と言ったのは失礼ながら的を射ている。島田先生は日本から英語で発信した人としてヨネ・ノグチがオクスフォード大学へ招かれて俳句について講演したことなどを壮拳のように話されたこともあった。しかし野口米次郎その人についても、またその野口をとりあげた島田氏についても、なにか力みのようなものを私は感じた。そして野口よりも九年前の一八八四年に渡米した新渡戸も西洋にさらされたことによって自己の日本人性を言わずにいられぬ衝動を感じた人だったのである。野口は芸術家であったから、日本の芸術について語ったが、新渡戸は倫理的な問題関心の強いプロテストの国で暮らしたから、倫理の問題について日本人として何か言わずにいられなかった。そうして書かれたのが *Bushido* だったのであるまいか。

## 七 日本人の英語著述の中で

それでは *Bushido* を当時の日本人の外国語著述の中で位置づけてみよう。森鷗外は一八八六年、ドイツでナウマンと論争をした。これはドイツ語で論争した文章だが、日本についての誤解を正したい、という西洋にさらされた日本人の反応としては、新渡戸の *Bushido* と相似た執筆動機をわかちもつものである。しかし英語による日本人の日本文化発信の著述者としては新渡戸に近く位置する人としては新渡戸より一歳年上の内村鑑三と新渡戸と同じ一八六二年生れの岡倉天心があげられる。

内村は一八九三年に *How I Became a Christian* を脱稿し、九四年には *Japan and the Japanese* を刊行した。後に『代表的日本人』など



の題で日本語訳もされた武士をもふくむ論である。前者『余は如何にして基督信徒となりし乎』が後者より有名であるのは、前者が内村の個人的体験を語っているからだろう。それに対して後者は西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人などを語っているが、必ずしも説得力のないお国自慢をしている。それでは *How I Became a Christian* が鈴木俊郎の訳文が世間に与える印象ほど立派な書物かという、私はそうは思わない。『ぼくはどんな風になつたのか』とでも訳せばよいというのが私の意見であり、この本から受けた幼稚という印象のことはよそに記した<sup>(8)</sup>。それだから繰返さないが、西洋人がこの本をさして評価したとは思わない。文明の程度の低い人間がどのように改宗するか、という興味から読まれた、というのが真相ではあるまいか。東洋の文化の内容をはるかに深く知り、それを洗練された英語で発信した人は岡倉天心である。一九〇三年に *The Ideals of the East* を、一九〇四年に *The Awakening of Japan* を、一九〇六年に *The Book of Tea* を西洋で出版した。その内村と岡倉の英語著述の間に一九〇〇年新渡戸は *Bushido, the Soul of Japan* が出ているわけである。

なおこれと同じような東洋人の英語による自己主張には北京大学の初代の英文科教授でありながら、辮髪を切らず、英語で儒教精神を唱え、そのため日本で評判の良かった *The Spirit of the Chinese People* (1915) の著者辜鴻銘(一八五四—一九二八)や林語堂(一八九五—一九七六)などがある。西洋にさらされたために中国人のアイデンティティーを逆に儒教に求め、中国古来の伝統の弁護人として発言を重ねた、英語名を *Ku Hung-Ming* という前者については、また別の機会に述べたい。

## 八 両方向への文化仲介者

新渡戸はいちはやく留学した人である。留学の思想とは自閉的な中華思想とは逆の発想であって、外国体験の意味を肯定するものである。そして新渡戸の場合、キリスト教本位の思想も強かったが、西洋文明を肯定する気持が強くあった。外国語で自国について発信したい衝動にかられはしたが、単に国威宣揚のためのナショナルリスティックで幼稚な衝動だけではなかった。新渡戸は西洋についてもアメリカだけでなくドイツをも知っていた。限られてはいたが三点測量もできた人である。

比較研究者におけるアイデンティティとは何か、という問題は日本人に限らず多くの国のコンパラティストにつきつけられて良い問題と信じるが、アメリカ人に取り囲まれて暮らし、日本について頓珍漢な質問をされ、アメリカ人の妻にも自国と自分のことを説明する必要に迫られた新渡戸は、自分の家の先祖と自分の育ちを考えた。そしてその中の何が自分自身の中に抜き差しならぬほど深く刻み込まれたかを考えたのであろう。その肉体化した倫理上の教えを武士道という言葉で要約した。そして英語国民にわかるように *Bushido, the Soul of Japan* を書いたのである。

日本に対しては西洋文化の紹介者であり、西洋に対しては日本文化の紹介者である、という両方向の仕事を一人でこなした人の数は実は今日にいたるまで意外に少ない。日本を知らない外国人の間で日本を美化して宣伝することには危険もある。しかしだからといって、日本についての説明をただ外国人にのみまかすべきことではない。日本についての誤解を上手に解く人は必要である。望ましいことは、外国で日本について外国語で語った人はその内容を日本語でも発表して世間の批判の目にさらすべきであらう、ということである。それでは *Bushido* は学術書として価値ある書物なのか。学問的検証にたえうる著述なのか。

## 九 外国における日本人の日本発見

*Bushido* は日本人向けに武士道を学問的に検証して書かれた学術書ではない。西洋人が日本を知らないことに乗じて書かれた一種の宣伝書である。そんな著者の新渡戸は『葉隠』も読んでいなかったではないか、とか、彼の日本知識は偏頗ではなかったか、と行って非難することは容易である。しかし書かれた時代ということも考慮に入れなければならない。そもそも二十世紀の初頭、かりに日本についての日本人専門家の著書が外国語に直訳されたところで西洋の一般読者に訴えたか否かは保証の限りではない。おそらく訴えなかったであらう。そこには外国語における自己表現の能力の問題もからんでくる。それに外国で日本について語るには相手の日本知識の程度を心得なければならない。また日本について教えることの意味は相手の外国人のコンテキストの中で説明することにより、日本人同士では当然自明とされている無言の前提をも言語化することにもある。多くの宗教は異国へ布教しに行く過程で宗教的内容を自覚的に再把握したが、それと同じよ

うに、日本倫理の再定義もそれが日本の外にさらされることによって可能となる。そのような事情を考慮すると、明治以前それほど多用されなかった武士道という語が士族階級が消滅した後、外地において自覚化されたとしても不思議ではない。また英国が興隆期にあったヴィクトリア朝で紳士道が自覚化され、下の労働者階級にも伝わったように、民族興隆期の明治日本で武士道が自覚化して唱えられることにより士族以外の平民の階級にまでひろまったとしても不思議ではない。だとすると学術書ではないにせよ、武士道について英語で語ったことには意味がある。矢内原忠雄訳『武士道』が岩波文庫で版を重ねてきたという事実は、この書物が読物として価値を有することを示している。一つの古典とみなす人もいるであろう。

## 十 *Bushido* と武士道は同じか

新渡戸が英語で綴った *Bushido* で言わずにいらなかった主張とは、異教国としてややもすればさげすまれる日本にも日本なりの倫理がある、ということであつたらう。新渡戸の言葉を借りれば自分にも幼児から「正邪善悪の観念」は武士の家庭で植え付けられてきた。そのことを述べたかったのである。山本常朝だの山鹿素行だの斎藤拙堂だのを考えて武士道を説いたわけではない。新渡戸が語りたかったのは副題の *the Soul of Japan*、いいかえると日本人には日本精神や大和魂があるぞ、という程度のことだった。新渡戸の *Bushido* の語はその程度に取るべきである。書物のタイトルとしてよりアピールすると考えて「武士道」の語を用いたまだから、日本倫理思想史の中で厳密に武士道とは何であつたかを詮索して異論を呈したところで始まらない。津田左右吉は明治三十四年いちはやく新渡戸の *Bushido* は大和魂の意味で用いているのではないかと指摘して、歴史的な武士道は新渡戸が説くところと違う旨詳説している。<sup>(9)</sup>

もっとも新渡戸にしてみれば自分は農民や町人の家に生れたのではなく武士の家に生れたのだから自分が武士道を口にしたのは自然だと思つていただろう。また *Bushido* の中の数多い西洋の引用については皮肉る評家は内外に多い。しかし西洋人読者に読み聞かせる論である以上、そうせざるをえなかつたともいえるのである。そのレトリックの戦術において、欧米の日本専門家向けにはともかく、一般読者向けには新渡戸は成功したのではあるまいか。 *Bushido* の中に武士道関係の日本人の人名は二十名であるのに対し外国人名は百四十名を越え

る。これは新渡戸の教養が西洋に傾いていたからだが、しかし西洋人名を引くことで Nietzsche は西洋の読者を得たのだとも言えよう。

## 十一 祖父新渡戸伝との関係

新渡戸の父は早く死んだ。それだから稲造には母と父方の祖父の影響が強かった。南部藩に仕えた祖父<sup>つたふ</sup>伝はたぐいまれな行動力と創意の人で、十和田湖周辺の荒野の開墾を計画し、不毛の大原野に十和田湖から疏水するという明治維新以前としては空前の灌漑工事を二十余年の歳月をかけてやりぬき、三本木原を沃野とすることに成功した。明治九年、東北巡幸のおり、明治天皇は祖父の開拓事業によってできた小さな町三本木を訪れ、稲造の生家に宿泊した。新渡戸家の人々は拝謁の栄に浴した。東京ではどの新聞も自分の生家に天皇が行幸したことを報じた。「私は自分の家族の歴史と、今後の自分の責任の重さに思いを馳せて胸が高鳴った」。そして事実、明治天皇が祖父伝の開墾事業を賞し「子々孫々克く農事に励めよ」とのお言葉をたまわったことに感激し、新渡戸は農業経済の専門家となり、明治二十四年から三十年まで札幌農学校で教え、三十四年、台湾総督府技師となり糖業による台湾統治の基礎を確立した。三十六年京都大学教授となり農政学を講じ、志を貫いたのである。

## 十二 単純な日本主義者と何が違うか

新渡戸の *Bushido* は学術の書物ではないから、学術書としての欠点をあげつらう批判は私は行なわない。では学術書ではないとして何のために *Bushido* を書いたのか。新渡戸の執筆動機に好意的な見方を示した和辻哲郎は、新渡戸の書物について『日本倫理思想史』でこう述べている。

新渡戸が捕えて見せたのは、戦国時代以来武士の間におのずから芽ばえて来た廉恥の道德、高貴性の道德、及びそれを儒教によって

根拠づけようとした武士道の考えなのであって、鎌倉時代以来の武者の習いでもなければ、また封建的な上下の秩序をささえる忠孝の道徳でもなかった。新渡戸は武士道の摘出によって日本人の道徳的背骨を明らかにし、日本人が西洋人の理解し得ないような特殊な民族でないことを示そうとしたのであった。従って日本主義者とは全然反対の方向に向いていたといつてよい。

新渡戸は日本の例をあげ、それに相応する西洋の例を引き、比較文化論的な考察を重ねながら、日本の武士道は西洋の騎士道の等価物であることを強調する。新渡戸は西洋人が日本において奇異とみなすものが西洋にも存在することを例示する。「いかに違うか」を言い立てずに「いかに似ているか」の説明に努力する。そのように共通点を探し求めたのは日本ないし日本人が西洋社会にアクセプトされることを新渡戸が強く望んだからであろう。新渡戸は東西の和解を求めるといふ見方もそこから出てくる。その点は、日本人の内輪同士で氣勢をあげてお国自慢をするナショナルリストとは違う。また日本のお国柄の外国と異なる所以をほめあげる単純なタイプの日本主義者とも違う。新渡戸における国際主義の問題が単純な日本主義者や国家主義者における場合と異なるのは、彼の場合には彼が西洋文明を重んじ、かつ彼の信条がキリスト教と絡むからであろう。

では新渡戸はナショナルリストではないのかといえはやはりナショナルリストなのである。日本にも西洋と同じものがある、ないしは西洋にも日本と同じものがある、と言いつたのは、新渡戸が「外国人より侮りを受けたくないと気張<sup>10</sup>」っていたからなのだ。しかし本物のインターナショナルリズムはナショナルリズムを踏まえてこそ成り立つのだから、新渡戸がナショナルリストでありかつ国際人であったとしても、そのことに矛盾はない。問題は新渡戸がその気張りのために無理を言っていないか、という点にある。

### 十三 松王丸の子とアブラハムの子イサクの犠牲

西義之氏は、新渡戸はその本心においてかならずしも賛成でない日本の切腹、敵討ちなどの風俗習慣を外国人に対しては弁護したのではないか、と先の論文で推理している。しかしそれはあくまで西氏の推定にとどまり根拠が示されていないから、それでもって是非の決着を

つけるわけにはいかない。西氏は新渡戸がとりあげた『菅原伝授手習鑑』も「クサイ芝居」だという。それは確かに残酷なクサイ話である。矢内原忠雄訳では新渡戸の紹介はこうなっている。

その物語は我が歴史上最大人物の一人たる菅原道真に関するものである。彼は嫉妬讒誣の犠牲となって都から追われたが、無慈悲なる彼の敵はこれをもって満足せず、彼の一族を絶やそうと計り、その子いまだ幼かりし者の所在を厳しく詮議して、道真の旧臣源藏なる者が密かにこれを寺小屋に匿いいる事実を探り出した。日を定めて幼き犯人の首引渡せとの命令が源藏に渡されし時、彼のまず思いついた考えは適當なる身代りを見出すことであつた。彼は寺子の名簿を按じ、寺小屋に入り来る児らをば一々注意深き眼をもって精査したが、田舎生まれの児らの中には彼の匿える若君と聊かの似通いをもつ者もなかつた。しかしながら、彼の絶望はただ暫時であつた。見よ、器量賤しからぬ母親に連れられて寺入り頼む一人の児あり、——主君の御子と同じ年頃の上品なる少年であつた。

幼き君と幼き臣との酷似を、母も知り少年自身も知っていた。我が家の奥にて二人は祭壇に身を捧げたのであつた。少年は彼の生命を——母は彼女の心を。しかし外には色にも出さなかつた。かくとも思いよらず、源藏は心ひそかにこれと定めた。

ここに犠牲の山羊が獲られた！……定めの日に検視の役人（松王丸）が首受取りにやって来た。贖首をもて彼を欺きうるであろうか。……松王丸は彼の前に置かれし浅まし首を引き寄せ、静かにためつすがめつした後、落ち付いた事務的な調子で、紛いなしと言いつ放つた。——その夜淋しき家にて、寺小屋に來た母が待っている。彼女はおのれの児の運命を知るや、彼女は戸口の開くのを熱心に見守っているが、それは児の帰りを待つのではない。彼女の舅は久しき間道真の恩顧を蒙つたが、道真遠流の後、夫は事情余儀なく一家の恩人の敵に隨身した。彼自身は、残忍とはいへ自己の主人に不忠たるをえなかつた。しかし彼の子は祖父の主君の御役に立つべきたのである。道真の家族を知る者として、若君の首実験の役目を命ぜられたのは彼であつた。今その日の——しかり一生の——つらき役目を仕遂せて、彼は家に帰り、敷居を跨ぐや否や妻によびかけて言った。「女房喜べ、倅は御役に立つたわ、やい！」。

「何という無残な物語！」と、読者の叫ぶのが聞える。「両親が相談の上で、他人の生命を救わんがためにわが児を犠牲にする！」。しかしこの児は自ら知りかつ甘んじて犠牲となつたのである。これは代贖の死の物語である。

個人的なことを述べさせていたでいて恐縮だが、私の母は歌舞伎が好きで松竹の株主になっていた。招待券が贈られてくるので大学生の私も母のお供を命じられた。ところが最初に見たのが『菅原伝授手習鑑』だった。それだから、その歪められた人間性に閉口して私はそれですっかり歌舞伎ぎらいになってしまった。ところで新渡戸は『菅原伝授手習鑑』は代贖の死の物語でアブラハムがイサクを献げようと思った物語と同様に意味深いとして話を進めている。だが私の反応はちょうど逆である。二つの物語は『菅原伝授手習鑑』に限らず創世記のイサクの物語も同様にマゾヒスティックで両者ともに不愉快だ、と申したい。伊作という名を父につけられた子供は父のことをどのように感じただろうか。矢内原伊作の『若き日の日記』は父矢内原忠雄との葛藤を記してまことに貴重だが、息子は「基督教以外はすべて邪教だ」と断言する父、「あの基督者以外の人間を人間ともみない排他的な口調」の父忠雄に反撥する。伊作は昭和十四年十二月二十九日に書いている。

父のあの眼の陰しき、あれはどうしても憎悪の眼だ。単なる軽蔑ではもはやない。……私はあの眼の故に父を嫌悪し、憎みさへする。この一節を読んだ時、私は矢内原忠雄という人の信仰に由来するあの眼つきや過激な説教に病的なるものを感じて反撥した学生時代の自分にはやはりそれだけのわけがあったのだな、と感じた。

よく考えてみると、新渡戸が『菅原伝授手習鑑』について弁護せねばならなかったのは新渡戸がキリスト教信者としてイサクの犠牲の話肯定せねばならぬ立場に立たされていたからではあるまいか。矢内原伊作のような立場に立たされた子供にとっては聖書のイサクの物語も残酷なクサイ話なのである。新渡戸などについては、日本人でありながらキリスト者であるために生じた無理という点にも世間はあまりし注意すべきであろう。

#### 十四 台湾で教えたことの意味

新渡戸稲造の生涯を収めた教育用のドキュメンタリーのビデオ・カセットがある。岩手の新聞社が郷土の偉人を称揚するべく製作したもののようだが、新渡戸が「太平洋の橋」だったことが強調されている。しかし新渡戸の台湾時代がすっぱり抜けている。これは台湾の植民行政に関係した新渡戸を「帝国主義者」と非難した西洋側や飯沼二郎氏のような左翼公式的歴史観の持主に気兼ねしてのカットであろう。しかし余計な遠慮である。その土地の住民によって日本の台湾統治が後の朝鮮統治とは異なる評価を受けている歴史的事実についてはきちんとその理由を考えなければならないのではあるまいか。

一八九八年、児玉源太郎が総督となり、後藤新平が民政長官となると、西洋の一部の国が植民地政策の主眼に宣教を考えたのに対し、日本はそうではなく衛生に主眼を置いた。これはまさしく文明の統治であった。新渡戸自身は植民政策にはヴィジョンがなければならぬと言いつつ博士の語を引いて「植民は文化の伝達である」と後年矢内原に言った由である。<sup>(11)</sup>ただしそのゾルフの原語は *Kolonisieren ist missionieren* というドイツ語であって「植民地化とはキリスト教化である」というスペインの中南米征服以来唱えられてきたと同じお題目であった。しかしそのミッションという言葉を新渡戸は「宗教的宣教事業」の意味にはとらず、「文明開化の事業」と受けとめたのである。そのような植民地統治の理念の下で一九〇一年新渡戸は殖産課長として精糖産業の青写真を描き、実際にものの見事に成功した。その実務家としての手腕のほどに驚かされる。台湾の経済状態が良くなるや一九〇三年に内地に戻り京都大学教授となって三年間農政学を担当した。

#### 十五 日露戦争

日露戦争に際して新渡戸稲造は、内村鑑三とは対照的に、日本政府の立場を支持した。新渡戸の妻メアリーが弟のジョゼフ・エルキント



ンに宛てた一九〇四年十二月十二日付けの手紙にこうある。このメアリーの日露戦争についての考え方の是非はさておき、彼女の内村評が興味深い。

内村さんを愛していても、彼の極端な考えにはとてもついていけません。彼は自分と反対の立場を取るものは黒と決めつけてしまう人で、彼の判断が必ずしも正しいものではないということをおぼえています。……今は政府を抑制すべきではありません。戦争は確かに恐ろしい。けれども、日本が当然自分に権利があると自負する土地を勝ち取るのに、文明の現段階においては、戦うことしか方法がありません。

「戦争反対」に反対とはいいいにくい。しかしそう言わなければならぬ時もある。その点をクエーカーの新渡戸夫人メアリーが言っているところが興味深いのである。非戦論とか戦争反対という人はしばしば思考中止というか思考放棄におちいつている。そこには独善的な態度も見られる。メアリーは内村にその傾向を感じたのであろう。

## 十六 大和魂

そして *Bushido* もまた日露戦争における赫々たる日本の勝利を説明する英文著書として、それを機に広く読まれたのである。日露戦争当時、岡倉天心の弟の岡倉由三郎はイギリスに留学していたが *The Japanese Spirit* なる一書を出した。それにはメレディスが序文を付している。 *Bushido* も *The Japanese Spirit* も同じような読まれ方をしたのであろう。夏目漱石は若い頃は英字新聞の記者として外に向けて発信するという野心を抱いたこともあった。しかし英国留学中になにもしなかった。漱石は英語で日本について語っていない。そもそもそうした機会は少なかったし、それに、機会を与えられるにはあまりに自閉的な留学生生活を送っていたからである。しかし明治三十八年、内外で日本精神が話題となるや、そうした世間の風潮に対して揶揄することはできた。『吾輩は猫である』の六で漱石はこう書いている。

「大和魂！ と叫んで日本人が肺病やみの様な咳をした。大和魂！ と新聞屋が云ふ。大和魂！ と揣摩が云ふ。大和魂が一躍して海を渡つた。……東郷大将が大和魂を有つて居る。肴屋の銀さんも大和魂を有つて居る。詐欺師、山師、人殺しも大和魂を大和魂有つて居る。……大和魂はどんなものかと聞いたたら、大和魂さと答へて行き過ぎた。五六間行つてからエヘンと云ふ声が聞こえた。」

そして日本海海戦の後、談話『戦後文界の趨勢』で、明治時代の日本人の心理について次のように鋭い観察を述べている。

吾々は大和魂——又は武士魂といふことを今までも口にしたが、然しこれを今日まで無暗に口にしたといふのは、或必要から出たのではあるまいか。これを事実の上に現する事なしに、その声をして高からしめんと叫んだのは、一方に精神の消耗といふ事を思はせるのと、一方には恐怖といふことを抱いたが為ではあるまいかと臆測するものがあるのも余儀ないことになる。自信があつていつたのではなくてその精神の消耗を杞憂する恐怖といふ語の呼び換へられた叫びであると思はしめたのも余儀ないのである。

もつてまわつた言い方をしているが、この漱石の洞察が一面の真実をついていることは否定できないだろう。

## 十七 弟子との関係

新渡戸は一九〇六年、明治三十九年九月に第七代一高校長となり足掛け七年つとめた。そのころ小石川の小日向町に床面積三百坪、部屋数三十の和洋折衷の邸を建てた。庭は千二百坪あった。外国人もしばしばこの邸に泊つた。日本関係の洋書も揃つたすばらしい図書室もあった。ちなみにそこで書生をしていた一人が田島道治である。鶴見祐輔、前田多門らはその邸に出入りした一高の愛弟子であった。

新渡戸は毎週日を定めて自宅に一高生を招いて話をすることを好んだ。前田陽一氏が戸山原に建つた平屋の狭い公務員住宅に東大教養学科フランス科の学生を招いて熱っぽい口調で語つたのは、そうした先例にならつたことだったのか、と今になって合点されるのである。

## 十八 交換教授

新渡戸は一高校長在任中の一九一一年、最初の日米交換教授として渡米した。鶴見祐輔も同行した。九ヶ月の間に百六十六回講義・講演をした由である。驚くべきパフォーマンスである。ただ面白いことに祐輔の長男鶴見俊輔は『戦時期日本の精神史』という講義を一九七九年にマツギル大学で行なった際「英語を話す日本人は信頼できない」と英語で言った由である（太田雄三『太平洋の橋』としての新渡戸稲造』みすず書房）。その講義・講演の回数もさりながら、*The Japanese Nation, its Land, its People and its Life*の内容が後世の検証に耐え得るものであるか否かも重要であると考える。今日でも国際交流基金などが海外に派遣する人々に対しては、いますこしその実績を追跡調査して、評定することが必要なのではあるまいか。

しかし新渡戸に対しては、校長在任中に一年近くも留守にするとは何事か、という非難は当然ながら起った。だが当時の日本には新渡戸のように英語で講演できる交換教授要員は少なかった。いやいままなお少ない。外へ出る人が日本を留守にする間にその地位を危うくされるという現象はいまなお続いているが、けっして健全なことではない。それでは外へ出て活動する人がいなくなってしまうからである。

## 十九 植民地帝国日本との関係

新渡戸は一高校長に任命されたと同時に一九〇六年東京帝国大学の植民政策担当教授となり、一九一五年まで教えた。新渡戸は植民政策を一面では肯定していた。西洋列強の植民地政策をよく調べた新渡戸は、当然それに張り合う国としての植民地国家日本を構想していたからだろう。とくに新渡戸本人が関係した台湾における成功が朝鮮併合を歓迎する談話ともなったのに相違ない。しかし新渡戸は一面では日本の植民地的発展の否定的な面にも注意していた。矢内原忠雄の「新渡戸先生一高校長辞職に関するノート」<sup>(12)</sup>に面会日に次のように語ったと記されている。この指摘は日本人の欠点について正確だったのではあるまいか。

日本人ハ個々一身ヲ省ミズシテ一ニモ二モオ国ノ為ナルライヒテ行動ス、patriotismナル美名ノ下ニ多クノ罪惡ハ行ハレツツアリ。彼等ハ individualityヲ忘レ、patriotismハ真ニ如何ナルモノナルカノ分別ツカズ、所謂国威発揚ノ名ノ下ニ於テ幾多ノ野蛮ナル行為ヲナス。サレバ列国ヨリ信ゼラレズ怨マルルハ勿論ノ事ナリ、各国ヨリ爪弾キセラルルニ至ラバ実ニ大變ナルベシ。事ハ国民全体ニ渉ル故根本的教育ヲ施スハ至難。暖イ事ヤサシイ事ナドハ、ワガ国現今ノ教育ニテハ大ニ neglectセラレテヲル。植民地ノ腐敗ハ延イテ本国ノ腐敗ヲ来タス。

## 二十 国際聯盟知的協力委員会

ジョージ・オーシロは伝記『新渡戸稲造』（中央大学出版社、一九九二）で名誉・努力・義務の人新渡戸を日本における国際主義の開拓者として高く評価しているが、一九二〇年から二六年まで新渡戸は国際公務員として抜群の功績をあげた。このことは疑いない。非西洋の人間が国際聯盟のために雄弁に弁じ、各地を精力的に訪れ、部下からも信頼された、ということは立派なことである。その新渡戸の功績の一つに国際聯盟の知的協力委員会がある。ギルバート・マリーが新渡戸評を述べたのは、彼もその委員の一人だったからである。それが母胎となって戦後ユネスコが生れた。

ところで前田陽一教授は、東大教養学部教授会メンバーの考え方が先生の考え方より左傾化したためだろうか、学部長に選ばれず、それもあってユネスコの事務総長の職に転ずることを望まれた。しかし一旦はうまくいくかに見えたその人事の話も頓挫した。その時先生がなぜあれほど落胆されたか当時の私にはわからなかったが、前田先生が新渡戸を模範として生きてこられ、ユネスコの前身である知的協力委員会の誕生に新渡戸が深くかかわっていたという由来を考えると、合点が行くような気がする。<sup>13</sup>

しかし狭くなる地球社会ではさまざまな人種や文化が接触の度合いを増せば増すほど摩擦はいよいよ起きるのであって、ただひたすら東西の対話を良しとするようなオプティミズムだけでは事態は必ずしもうまく進みはしないであろう。

## 二十一 東西平等主義者の陥穽

それというのも、東洋と西洋が平等であることを前提とするような対話は飾りごとになりやすい。国家主権の平等を前提として対等の文化交流を想定することは文化交流の実態にそぐわない。私はユネスコなどの仕事にそれほど信頼を置くことができない。西洋と東洋が対等な文化関係にあるのではない以上、非西洋は苦闘しなければならなかった。そしてそのようなチャレンジとリスポンスの関係こそが比較研究の好主題なのだ、という風に認識するまでには私には時間がかかった。<sup>(14)</sup>

ちなみに私自身は留学四年目、フランスもまたかつては文化的劣等感にさいなまれた時代があった、ということを実感するに及んで目が開かれた者である。鷗外がドイツ医学もアラビア医学に遅れをとっていた時代があったのだ、と気づいた時と同じように、私もまた歴史的視野の広がりを感じ、日本の文化的可能性を信ずることができたのである。

新渡戸の強がりやをなしとしない比較文化論にはやはり私は信を置くことはできない。あたかも東西文化が平等の価値があるかのごとく言い立てて、両者の融合をはかる、という主張には無理があるのではあるまいか。

## 二十二 内なる反西洋、外なる反日本との戦い

矢内原忠雄は昭和十三年「人及び愛国者としての新渡戸先生<sup>(15)</sup>」の中で、両面作戦を戦った新渡戸についてこう総合的に評価を下した。

先生は外国人に向つては日本の美点長所を紹介することに随分努力せられた。先生が最初渡米せられた頃は、……日本は未開野蛮の国様に見られた。それに対して日本の美点を知らすと言ふ立場から書かれたのが英文『武士道』で、之は明治三十二年の事である。当時は日本の存在などは西洋諸国では問題にしなかつた時代であるが、我々から見ると言ひすぎと思はれる程に先生は日本を弁護し、

……一方日本に対しては外国の美点長所を紹介せられた。先生に於ては「個」の尊重が Sociality の基礎である如く、国の存在価値の認識の上に国際心を説かれた。かゝる御考へから先生が国際問題の為に努力せられた事は非常なものである。

これと同様趣旨は森戸辰男も「教育者としての新渡戸先生<sup>16</sup>」という一文に書いている。

今日から回顧して特に感ぜられることは、『武士道』の著者が吾々に対してこの武士道を理想的なものとして鼓吹せず、むしろ欠陥とも思われる人格、教養、社交性を強調された。先生は武士道によって欧米人をして我国伝来の精神文化の価値に眼を開かせ、根柢なき東洋軽侮の態度を反省させたが同時に——我国に於ける反動主義者の態度、すなわち無反省に我国文化の価値を過大評価し、之に感激してひたすら西洋文化を蔑視若しくは、敵視するが如き我国に於ける反動主義者の態度には決してくみされなかった。

そのような新渡戸の態度であった。ただ私はそこに矛盾があると言いつつ立てて新渡戸をおとしつめるつもりはない。発言は相手に応じて変わるものであり、それが自然であり智恵だからである。

新渡戸の晩年の貴族院議員としての発言や京都における太平洋問題調査会の活動の意味は大きい。世間に知られることが少ないが、いままなお顕彰に値する。一九三三年渡米してこの期に及んでなお日本のために論じた新渡戸の発言を当時の一部アメリカ人は「軍閥の弁護」と呼んだ。その種の誤解や悪罵はこうした状況下では必ず発生するものである。だからその尻馬に乗ってその人たちと同じように新渡戸のことを私は悪くいたくはない。その悪意の推理の中には次のような説もあった。いわゆる松山事件で新渡戸は「軍国主義は共産主義に劣らぬ大きな危険である」と発言した。怒った在郷軍人が病院入院中の新渡戸に面会を求め、謝罪を求めた。新渡戸はその松山事件の追及の手をゆるめてもらうためにその二カ月後の一九三二年四月に渡米して、自己の確信とは違う日本弁護の論陣を張ったとする推理である。

その種の推理は私には笑止に思える。その種の発言をしたアメリカ人の多くは、米国が排日移民法などで自国が日米関係をどれほど悪化させたかについて自覚するところが少なかったのではあるまいか。シオドア・ルーズヴェルトにしてもフランクリン・ルーズヴェルトにし

でも軍事大国として台頭する日本を叩くという大局的構想を心中で抱いたであろう。そのような両国の力関係であった以上、米日両国は日露戦争直後からすでにコリジョン・コースを走り出していたのだ、といえるだろう。だが新渡戸には「太平洋の橋」たらんとする意志は最後まであった。その熱意が次の世代に伝わったからこそ、その遺志をついで日米戦争の後に日米間のきずなをふたたび結ぶ人があらわれたのである。そして日米関係の再構築の過程で新渡戸山脈の人材が活躍したのは周知の通りである。日本の自由主義者は日本が戦争に突入することを防げなかったではないか、と批判する人はいる。だがだからといって、盲目的にモスクワを信頼しそれに追従したが故に反戦を唱えただけの戦前の日本共産党の立場が正しかったとは私は思わない。

## 二十三 社会教育者

生前の新渡戸にとって聖書に劣らず大切な書物はカーライルの『衣服哲学』であった。そのような新渡戸は宗教よりも修養を説いた。そして『修養』を一九一一年、『世渡りの道』を一九二二年に刊行した。当時の新渡戸は日本では『武士道』より『修養』で知られていたと渡部昇一教授は『幸田露伴の語録に学ぶ自己修養法<sup>(17)</sup>』で述べている。そして「近代の教養主義は、修養という言葉を嫌がる傾きがある」としている。<sup>(18)</sup>もっともこの修養と教養の問題について矢内原は「内村鑑三と新渡戸稲造」の中で両方とも英語にすれば culture で同じだが、それでも「修養には、今日の教養に比べて頗る道徳的要素を多く含んでをります」と述べている。

そうした新渡戸には広く社会教育者の面もあった。当然日本における女子高等教育のことも念頭にあった。一九一八年、東京女子大の初代学長となった。恵泉女学園の河合道女史と親しく、クエーカーの普蓮土学園のためにも力を貸した。なお新渡戸も河合も日本の天皇をいまだく国柄を良しとするクリスチャンであった。反天皇制のイデオロギーの色眼鏡をかけず、すなおに見れば、それが彼らの立場であったことは明らかであろう。

## 二十四 衣服哲学講義

新渡戸は言葉に敏感な人であった。レトリックにも興味があった。語の広い意味での文学者であり、話し上手でもあった。教育熱心で、高でも校長として課外講義を行なったが、そこで評判だったカーライルの *Sartor Resartus* についての講話を一九一八年夏、軽井沢でもまた繰返し行っており、その速記録が『新渡戸稻造全集』第九巻に収められている。話がはずんでいかにも面白い。カーライルの文章を聴衆に鑑賞させる新渡戸の技術はたいしたもののである。それは新渡戸自身に *Sartor Resartus* を夢中になって読んだという原体験があったからだろう。「永遠の否定」から「永遠の肯定」へと移るあたりは熱がこもっている。そして「一番汝に近い義務をやれ、さうすればその次の義務は自ら明らかになつてくる」“Do the Duty which lies nearest thee” which thou knowest to be a Duty! Thy second Duty will already have become clearer. と説く。その考えはゲーテから来ているのである。新渡戸はこの第二巻で主人公が悟りの道に入るくだりがカーライルの精神的伝記とも云うべく全編中最も意味深いところであるとしている。

## 二十五 新渡戸山脈はよみがえる

ここで話を台湾へ戻す<sup>(19)</sup>。第四代の台湾総督児玉源太郎が後藤新平民政長官を連れて渡台してちょうど百年後の一九九八年に出た台湾の国民中学歴史教科書『認識台湾』には「日本植民統治時期の政治と経済」の章に「農業改革」が次のように記されている<sup>(20)</sup>。

日本の植民統治の開始後間もなく、総督府は「農業台湾、工業日本」の政策を確立し、台湾を米と砂糖の生産地とし、積極的に農業改革事業を推進した。1、各地に農業研究機構を設立し、新しい品種と化学肥料を提供するとともに、新しい耕作技術を指導した。2、各地に農会を成立させ、新しい品種と農業技術を推し広め、農民に農業の新知识を注入するとともに、農業資金の貸し付けなどを行っ



た。3、水利工事を行い、耕地灌漑面積を大きく増加させた。その中で最も有名なのが八田与一が設計、建造した嘉南大圳で、灌漑面積は15万甲<sup>(21)</sup>に達した。

「米の増産と糖業王国の確立」は次のように記されている。

農業改革のもとで、水田面積と二毛作水田は不断に増加し、米の生産量は激増の勢いを見せ、なかでも1922年の蓬莱米栽培の成功は、台湾の米生産にさらなる画期的進展をもたらした。総督府の強制的な推し広めにより、蓬莱米の植え付けは迅速に全台湾へと普及し、米の生産量は大幅に増加し、かつ日本へ大量に移出された。

台湾は砂糖の主要産地であったため、総督府は台湾の糖業の改革に尽力し、日本国内の需要に応じた。サトウキビの生産過程の改良後は、単位面積あたりの生産量が大幅に増加し、作付け面積も拡大した。

日本の植民統治の開始後間もなく、総督府は製糖工業の近代化に尽力し、資金援助、原料採取区域の指定、市場保護の三大措置を実施し、日本の新興製糖資本家への支援と保護を行った。これにより日本の資本家は競って台湾に投資に訪れた。製糖業は台湾で最も代表的な産業となり、その生産量は不断に増加を見せ、最盛期には年間生産量が150万トンにまで近づき、台湾を世界における糖業王国の一つにした。

ここに記されているのは新渡戸が確立した農業政策が台湾にもたらした物質上の福利である。八田与一は台湾総督府技師として新渡戸の敷いた政策路線を先に進めた。より正確には新渡戸の祖父が三本木で行なった耕地灌漑面積拡大の事業をさらに大規模に行なった。そこに新渡戸伝、新渡戸稲造、八田与一という継続性を感じずにはいられない。八田は一八八六年に金沢に生まれ、東大土木工学科を卒業、第二次世界大戦に際しては台湾からフィリピンへ南方開発派遣要員として赴く途中船が沈められ亡くなった。八田夫人は敗戦後、夫が築いた烏山頭ダムに身を投じて覚悟の入水をとげた。八田与一の名は日本の辞典には出ていないが、台湾では銅像が建てられており深く敬愛されて

いる。日本人が台湾にもたらしたのものには精神上のなにかもあつたのである。そしてこの系譜はさらに台湾人へとつながるのである。

## 二十六 義務の観念

台湾で新渡戸が敷いた路線に沿って進んだ人には一九二三年生まれの李登輝前総統もいた。台北高等学校を卒業後、京都大学農学部へ農業政策を学びに進学した。そして後にアメリカのコネル大学博士課程で農業経済学を学んだ。キリスト教信者でもある李登輝にとって新渡戸稲造は仰ぎ見る先輩であり、彼にとっての *role model* でもあつたのだろう。二〇〇三年には直接日本語で『『武士道』解題』を小学館から刊行した。これは日本の武士道一般を論じた書物ではなく、あくまで新渡戸の『武士道』について語つたものである。

李登輝が生れた年は西暦の一九二三年、日本暦の大正十二年で、新渡戸が台湾を去つてからすでに二十年が経つていた。李登輝は直接新渡戸の『武士道』を読み出した青年ではない。李登輝はカーライルを通して新渡戸に出会うのである。李登輝は旧制の台北高等学校で英語の時間に *Sartor Resartus* 『衣服哲学』を読まされた。著者カーライルが言わんとする大意はじんじんと身に沁みだ。しかしもっと深く知りたいという衝動に駆られ李青年は内外の関連書を探して読んだ。そしてその際の偶然の発見をこう伝えている。

そんなある日、……台北市内のいちばん大きな公立図書館で……出合つたのです。かつて台湾総督府の農業指導担当の技官として台湾の製糖業などの発展に大きな働きをしていた新渡戸稲造という方が、毎年、夏の軽井沢に台湾の製糖業に関係している若き俊秀たちを集めて特別ゼミナールを開いていたことがあり、その中心教材としてカーライルの『サーター・リサータス』を取り上げていたという事実を知つたのです。ほとんど黄色く変色しかけたその『講義録』を手にしたとき、私は思わず飛び上がって喜びました。そして、何度も何度も読み返しているうちに、「永遠の否定」が「永遠の肯定」へと昇華してゆく過程が次第に明確に理解できるようになり、いまさらながらのように新渡戸稲造という日本人の偉大さに心酔するようになりました。<sup>(22)</sup>

こうして『衣服哲学講義』に始まって李登輝氏はさらに新渡戸の著述が読みたくて『武士道』に向かったのである。『武士道』解題』では第一部「日本の教育と私」が自伝的で興味深い。李登輝氏の修養努力は日本の旧制高等学校生徒の *sich bilden* の努力そのものなのであつた。そこには日本内地出身者と台湾出身者の区別や差別は感じられない。そこに語られる教養主義の読書目録は戦前日本の旧制高校のエリートが熟読した書物の題目なのである。

## 二十七 興学院師道謹厳大居士

以上比較研究者としての私たちの生き方との対比の上で新渡戸稲造の人と著作にふれてきた。新渡戸の系譜を引く前田陽一教授に多く触れたが、最後に島田謹二教授の生き方にも触れたい。「興学院師道謹厳大居士」とは島田先生の戒名である。島田先生は日本で比較文学を興したと自負できる方だつた。師として弟子の育成に非常な情熱を傾けた。興学院もよい、師道もよい、しかしさまざまな女性にかしづかれた島田先生に「謹厳大居士」とはいかがか、とお感じの方もいるだろう。しかし先生はこと学問や教育にたいして実に真剣であつた。謹厳であつた。私はそう感じている。一度「先生は実に真面目に授業をなさいましたが」と先生に直接そのわけをお尋ねしたことがある。すると「若い時にカーライルの *Sartor Resartus* を読んだ。あの本が私に *duty* ということを教えてくれた」と言われた。それがどこまで真実かどうか知らない。島田先生は若くして台北帝国大学講師となり、台北高等学校でも教壇に立たれた。人間自分が大切に思う書物を教室でも教えるものである。島田先生は自分が担任のクラスで *Sartor Resartus* を教えた。そしてそのクラスに若き日の李登輝生徒はつらなつていたのである。

新渡戸稲造に始まる人間の系譜が私どもの比較文学とも無縁でないことは以上でおわかりいただけただかと思う。私は外国人が日本に来て教えたことが無意味などと考えたことはない。それと同様に私たちが外国へ出向いて教えたことも無意味などと考えたことはない。それと同様に戦前の日本人が台湾で教えたことも、また外国で外国語で講演したことも、決して無意味ではなかつた。そのような系譜の中で、英語で日本についていちやく説明した新渡戸の場合についてその長短両所を再考し、あわせて比較研究者はいかにあるべきか、という問

題を再吟味した次第である。

注

- (1) 西義之「Bushido考——新渡戸稲造の場合」『比較文化研究』第二十輯、一九八一、p. 32。なお続編は第二十一輯、一九八二、に載っている。
- (2) 東大教養学科でもアメリカ分科では東大法学部の高木八尺教授の存在は大きく感じられた。高木教授は新渡戸の感化を浴びた人だが、しかし新渡戸自身の存在は第二次大戦後の駒場にはほとんどなかった。一つには過去の人と思われたことと、いま一つには日本人が国際社会の舞台で活躍する機会が鎖ざされたため、新渡戸への共感も働かなくなったことも理由かと思われる。文化人類学を教えたポールズ博士がクエーカーで新渡戸や日本と縁のある人であることは知られていた。
- (3) 私個人は過渡期に生き、飛び級をしているために、今日の学制では大学にストレートで入学する者がこれから第二外国語を始める満十八歳という年齢で、ドイツ語ではゲーテを、フランス語ではモーパッサンを、すでに習っていた。過渡期には過渡期の特権がある、と有難いことに感じている。
- (4) 『竹山道雄著作集』第四巻、福武書店、二一九頁。
- (5) 緒方貞子「国際主義団体の役割」、細谷千博編『日米関係史——開戦に至る十年』、(東京大学出版会、一九七三年)、第三巻 pp. 307-353
- (6) その東大教養学科に私はいまから一九五〇年の秋に第一期生として進学し、半世紀以上前の一九五三年に大学院比較文学比較文化課程にこれまた第一期生として入学した。
- (7) それに対して前田陽一教授は西洋人と同じ土俵で西洋文学を研究するという立場だったから、日本人としての文化的国籍を不問に付していた。前田教授と島田教授の二人の学者としての違いを学生の私は非常に強く感じた。西洋人と対話できる立場に立たねばならぬと思うが、西洋本位の学問であつてよいのか、例えば、本文批判などの研究は当該国の学者に任せるべきだというサンソムの考えの方が自然で素直だと思つたし、いまも思っている。私は西洋の優れた日本研究者のサンソムやウェーリーが日本文化に相對したのと同じ態度で自分は西洋文化に相對すればよいのだと考えてきた。これに対し西洋的な学問だけが普遍的な学問だとお考えの向きは多かつた。いまも多いようである。
- (8) 平川祐弘『西欧の衝撃と日本』(講談社、一九七四年)、第四章。私はカナダの学生たちが *How I Became a Christian* を読まされて「ウチムラは本当に偉い人なのですか」と教授に質問する場面に居合わせたことがある。ハウズ教授は「私が出会った内村の弟子たちは立派な人だったから、先生も偉い人のだろう」とそつなく答えた。
- (9) 新渡戸に対しては一方に盲目的に近い礼賛者があり、他方に芥川龍之介の『手巾』、志賀直哉の『鳥取』などのシニカルな批判者がいる。Gilbert Murray は、新渡戸自身が『偉人群像』の中に引いたところによると「日本人で武士道を主張し、クエーカー宗派に入って、古代ギリシアの文学を語るとは、何といふ奇態な混合物だ」といったさうである。外国人の日本研究者では Basil Hall Chamberlain や K. S. Latourette が違和感を露骨に表明している。その反応には、妙に日本語が達者な外国人が日本語で自国弁護をまくしたてると「変な外人」と日本人が感じる

様に似ていないでもない。勝手なことをまくしたてて評判をとる人に対する違和感でもあろう。もっとも新渡戸が西洋の日本研究の枠組の中におさまって発言しなければならぬ義理はないのだから、学術的水準に達していない、という文句は通用しなかったであろう。実は新渡戸の英文著書は日本の日本研究の枠組の中におさまるべき本でもなかった。新渡戸の述べる武士道の内容に対して学術的な批判を述べた人としては津田左右吉、柳田国男などがあるが、空振りの感を免れないのはそのためである。その二人が後に学問的厳密さを欠く日本人論としてルース・ベネディクトの『菊と刀』に対しても批判的であったことは興味深い。その批判も日本人の多くの人を首肯させはしたが、戦勝国の日本研究者の耳にまでは届かなかったようである。著者ベネディクトのつもりはともかくとして、『菊と刀』は結果的には学術書の体裁をとったプロパガンダの書物であったからであろう。それだけに津田や柳田などのベネディクトに対する学術的批判もやはり空振りの感をまぬかれなかった。

(10) 川西実三「新渡戸先生に関する追憶」前田多門・高木八尺編『新渡戸博士追憶集』。

(11) 「内村鑑三と新渡戸稲造」矢内原忠雄全集 第二十四巻、p. 395

(12) 『矢内原忠雄全集』第二十四巻、p. 660

(13) 私自身は国際交流基金はじめ多くの文化機関の恩恵をたくさん受けてきた。しかし人には向き不向きがある。五十代の半ばに在外の国際交流の機関の長にならないか、といわれた時、私は自分は国際交流の事務担当の官吏であるより壇上で講演するアクターである、とあらためて自覚した。その後も行政的な仕事はなるべく辞退して研究執筆に専念している。そうした立場から見えていたためであらう、ユネスコの長に転じようと言われた前田先生のお気持がよく理解できなかった。

(14) 個人的な体験を述べさせていたと、十六世紀にはフランス人がイタリア文化に対して劣等感を抱いていた。その心理が明治以来の日本人の西欧文化に対する劣等感に似通っていた。仏魂伊才の主張に接して私は和魂洋才の研究を始めることができたような気がする。

(15) 『矢内原忠雄全集』第二十四巻、p. 694

(16) 『新渡戸博士追憶集』一九三六年。これは一九八七年に『新渡戸稲造全集』別巻として再版された。

(17) 渡部昇一『幸田露伴の語録に学ぶ自己修養法』致知出版社、二〇〇二年、p. 6

(18) 渡部氏は同書 p. 6-10 で「早い時期に人生の出世街道に乗ったような人は修養で苦しむことがなかったからではないか」として、こともあろうにその実例として平川祐弘の名をあげ私が「修養的なことは余計な話だ」といったと出典も示さずに書いている。いささか迷惑な話である。

(19) 私は自分自身が大陸や台湾その他で教えた者である。そのことが将来どう評価されるのだろうかと考えたことがあった。肯定的に評価されるにきまつていると読者はお考えになるだろう。だがそれにもかかわらず、このような問題提起をするのは、かつての日本人の外地における仕事を全否定する人々が内外にいるからである。全否定する人々は間違っているというのが私の考えである。

(20) 『認識台湾』の日本語訳は『台湾を知る』という題で雄山閣出版、二〇〇〇年。引用は同書 pp. 83-85

(21) 甲とはもと台湾における地積の単位で約百二十二坪と諸橋『大漢和辞典』にあるが、ここでは甲は一町歩およそ一ヘクタールの意味で用いられているようである。なお圳とは耕地用灌漑用水のことである。

(22) 李登輝著『武士道』解題、小学館、二〇〇三年、pp. 65-66